

「今日は疲れただろう。ゆっくり風呂に入って、休め」

「うん、ありがとう」

私は先にお風呂を借りることにした。広いバスタブに浸かりながら、今日一日の出来事を振り返る。薬指の指輪を外しまじまじと見つめる。これが婚約指輪。慧兄が私を選んでくれた証。

(これで、本当にいいのかな……)

喜びと同時に小さな罪悪感が頭をもたげる。両親の顔が浮かんだ。騙しているような後ろめたさ。でも、もう引き返せない。私は慧兄の愛情に全てを委ねてしまいたいと思った。

風呂から上がりドライヤーで髪を乾かしていると、リビングから物音がしなくなった。どうやら慧兄も自分の部屋に入ったようだ。少しだけほっとした。今日はさすがに、これ以上何かあるとは思えなかったから。

部屋に戻り、ベッドに横になる。新しいシーツの匂い。静かな部屋。遠くで聞こえる車の音。慣れない環境になかなか寝付けそうになかった。

コンコン。

ドアがノックされる。心臓が飛び跳ねた。

「真由、起きてるか？」

「……うん」

観念してドアを開けると慧兄は部屋着姿で立っていた。その手には、ワイングラスが二つ。

「寝付けないんだろう？ 俺もなんだ。よかったら、少しでも付き合ってくれないか？」

断る理由なんて、なかった。

****第4章 純潔の証****

リビングの間接照明だけが、部屋をぼんやりと照らしている。大きな窓の外には都会の夜景が宝石箱のように広がっていた。私たちはソファに並んで座り、静かにワインを口に運ぶ。アルコールのせいだけではない熱が身体の内側からじんわりと広がっていく。

「夜景、綺麗だね」

「ああ。この部屋を選んだ理由の一つだ」

「そうだったんだ」

会話が途切れる。沈黙が妙に気まずい。いつもは慧兄から話しかけてくれるのに、今夜は何かを考え込んでいるように見える。

「真由」

「.....なに？」

ワイングラスをテーブルに置いた慧兄が、私の肩を抱き寄せた。彼のシャツからほのかに石鹸の香りがする。

「怖がらせるかもしれないけど、言わせてほしい」

耳元で、低く響く声。

「俺は、お前が思っているほど出来た人間じゃない。ずっと、お前を汚い目で見てた。妹のくせにつてわかってるのに、どうしても欲しかった」

その言葉に、ドクンと心臓が脈打つ。

「血が繋がっていないとわかった時、心底ほっとした。これで誰にも咎められずにお前を抱けるって。……最低だろ？」

自嘲気味に笑う慧兄の顔は夜の闇に溶けて、よく見えない。でも彼の腕に込められた力は強く、まるで私が逃げ出さないように捕まえているみたいだった。

「最低なんかじゃ、ないよ」

私は、慧兄の胸に手を置いた。彼の心臓も、私と同じくらい早鐘を打っている。

「私だって、お兄ちゃんのことそういう目で見てた。……いやらしい夢も、何度も見たよ。お兄ちゃんに触られる夢」

慧兄が息を呑む気配がした。

「だから、おあいこ。……お兄ちゃん、私のことちゃんと抱いてくれる？」

自分からこんなことを言うなんて信じられなかった。ワインのせ

い？ それとも、これが私の本性なの？ わからない。でももう理性のタガは完全に外れてしまった。

「……もう後悔しても、遅いからな」

慧兄の顔が近づく。唇が触れるか触れないかの距離で、彼は囁いた。

「今からお前を、俺だけのものにする」

返事をする代わりに私は自分から唇を重ねた。それが合図だった。慧兄の手が、私の部屋着の裾から中に滑り込んでくる。熱い掌が素肌に直に触れた。

「ん……っ」

「真由の肌、すごく柔らかい。ずっとこうやって触りたかった」

彼の指が、背中を這い上がりブラジャーのホックを探り当てる。慣れた手つきで外され、解放感と共に胸の先端が服の布に擦れて、小さな声が漏れた。

ソファに押し倒される。上着を脱がされ、ブラジャーを取り去ら

れると私は上半身裸の状態で、慧兄の視線に晒された。

「見ないで……恥ずかしい」

「嫌だ。ちゃんと見せて」

抵抗する私の腕を片手でシーツに縫い付け、慧兄はもう片方の手で私の胸の膨らみをそっと包み込んだ。

「あっ……!」

直接触れられた感触に身体がビクンと跳ねる。慧兄の指が、頂点を優しく撫でゆつくりと円を描くように動く。

「可愛い色だ。淡いピンクで、すごく綺麗だ」

「や、言わないで……あん!」

親指と人差し指で摘まれて軽く引っ張られると、背筋に甘い痺れが走った。自分の意思とは関係なく腰が浮きそうになる。

「感じやすいんだな。可愛いよ」

慧兄は嬉しそうにそう言うと今度は顔を近づけ、私の胸の先端に

そっと口づけた。

「ひやつ……」

生温かくて、柔らかい感触。舌が這い回り吸い上げられる。くちゅ、と水音がしてそれが異様に官能的で、頭がおかしくなりそうだった。

「やだ、お兄ちゃん、恥ずかしい……っ」

「嫌じゃないだろ？ ここ、さっきよりずっと硬くなってる」

指で摘ままれながら言われ羞恥心で顔が熱くなる。でも、彼の言う通り身体は素直に快感を受け入れていた。触れられていない方の胸の先端も、つんと上を向き切ないほどに疼いている。

「こっちも触ってほしいのか？」

「……うん」

「素直でいい子だ」

反対側の胸にも同じように愛撫が施される。二つの胸を同時に揉みしだかれ、時折、乳首をきつく抓られると頭の中が真っ白になった。